



機密

拜啓陳者大隈重信侯傳御編纂ノ材料トシテ曩ニ埴原前外務次官ニ御
依頼相成候條約改正ニ關スル書類別紙ノ通及御送付候間右御了承相
成度候尙同書類中ニハ從來機密扱ト致シ居リ候ニ付之ヲ傳記編纂上
御利用相成候段ハ差支無之候モ其書類ノ出所ヲ示サス又其ノ儘引用
セサル様致度此段得貴意候 敬具

大正十二年四月七日

田 中 外 務 次 官

市 島 謙 吉 殿

外 務 省

(已 號 用 紙)

(已號用紙)

大隈侯傳記編纂材料 (大正十二年三月三十日調成)

- 一、條約改正ノ治革大要 (明治四十一年六月川島領事官補調査「本邦ニ於ケル最惠國約款ノ~~治~~「~~治~~革」ヨリ拔萃)
- 二、條約改正方針ニ關シ明治二十一年十一月外務大臣大隈重信ヨリ在外各帝國公使ニ宛テタル訓令要旨
- 三、大隈條約草案拔萃及宣言
- 四、米、獨、露トノ條約調印期日
- 五、條約實施時日延期ノ手續及其理由書摘要

一、條約改正ノ沿革大要

明治四十一年六月川島領事官補調査一本邦ニ於ケル最

惠國約款ノ沿革」ヨリ拔萃

抑モ我國カ和蘭以外ノ歐米諸國ト條約ヲ締結セシ^ハ嘉永七年(一八五四年)三月下田ニ於テ米國トノ間ニ調印セラレタル所謂ペル^リ條約ヲ以テ嚆矢トナス之ニ次テ英露二國トハ下田ニ於テ締約シ和蘭トハ長崎ニ於テ追加條約ニ調印セリ

而シテ是等ノ條約ハ安政五年七月(一八五八年)江戸ニ於テ英、米、佛、蘭、露ノ五ヶ國ト締結セラレタル所謂安政五ヶ國條約ニヨリ廢棄又ハ補充セラレタルカ故ニ我國ニ於テ所謂舊條約ト稱シ現行條約ノ實施ニ至ル迄不對等の規定ノ下ニ^苦痛ヲ受ケ居タルハ

右安政五ヶ國條約ナリトス

然レトモ安政五ヶ國條約ニ於テハ領事裁判權ヲ外國ニ賦與シタル
ノミニシテ我關稅權ニハ未タ重大ナル束縛ヲ蒙ラサリシカ其ノ後
我ニ於テ國歩多難ヲ極メ曩ニ約シタル如ク開港スルヲ得サリシカ
爲メニ慶應二年英・蘭・米・佛四國ト江戸ニ於テ所謂改^改政稅約書ナ
ルモノヲ調印シ輸出輸入ノ諸品凡テ價五分ノ割合ヲ基本トシテ從
量率ヲ協定スルニ至レリ而シテ是等條約上ノ義務ハ其ノ後締結シ
タル獨・瑞・白・丁・伊・葡等諸國トノ條約中ノ最惠國約款ノ作
用ニヨリ是等諸國ニ對シテモ我國ハ同一ノ束縛ヲ蒙ムルニ至リシ
ナリ如斯我法權稅權ヲ束縛シタル諸國トノ條約ハ明治政府ノ繼承
スル所トナリシカ其ノ後明治二年奧國ト締結シタル條約ノ條款ニ

(已號用紙)

依り我國ハ更ニ綿密ニ條約上ノ義務ヲ負擔スルコトトナレリ
然リ而シテ安政五ヶ國條約中ニ一兩國ニテ條約ノ實地ヲ檢シ改革
セムコトヲ求ムルトキハ其ノ一年前ニ通達シテ再檢ヲナス可シ其
ノ事ハ今ヨリ凡ソ十四年ノ後ニアル可シトノ規定ヲ採用シテ^檢
モ其ノ十四年目ナル明治四年ニ政府ハ岩倉大使一行ヲシテ改正條
約ノ草案ヲ携ヘテ歐米ニ^園遊セシメタルモ米國以外ノ國ハ少シモ
我提案ニ誠意ヲ拂ハス大使一行ハ手ヲ空ウシテ歸朝スルノ外ナカ
リキ明治十一年ニ至リ寺島外務卿ハ法權稅權併セテ同時ニ回復ス
ルノ困難ヲ想ヒ先ツ稅權ノミヲ回復シ協定稅率ヲ全廢シテ關稅率
ヲ引上ケ國帑ヲ充實シ以テ十年ノ役後ニ於テ紛雜紊亂セル我財政
ノ整理ニ資セムトスルノ計畫ヲ立テタルモ米國以外ノ諸國ハ何等

ノ讓步ヲ肯セス米國ノ承諾モ亦他ノ各國カ同一ノ承諾ヲ爲スヲ條件トセシカ故ニ其ノ計畫ハ何等ノ效果ヲモ奏スルコト能ハサリキ
嘗ニ加之當時居留地ニ於テハ外國ノ勢力浸潤セルコト既ニ深ク我
政府ハ居留地ニ對シテハ何等ノ行政權ヲモ加フル能ハサリシヲ以
テ法權ヲモ併セテ回復スルニ非レハ單ニ稅權ノミノ回復ハ充分ニ
其ノ功ヲ奏セサルヘントノ議論旺盛トナリ寺島卿ノ改正案ハ我國
ニ於テモ悅ハレサルニ至レリ
寺島卿ニ付テ立チタル井上外相ハ法權稅權共ニ一分宛回復スルノ
案ヲ立テ明治十二年該國ニ向ヒテ交付セラレタル井上外相最初ノ
提案トナレリ本提案モ亦諸國ノ承諾スル所トナラサリシヲ以テ井
上外相ハ遂ニ新利益ヲ提供シテ條約改正ヲ遂行スルノ案ヲ立テ其

後明治十五年四月東京ニ於テ十二ヶ國ノ代表者ト會同シテ開キタル彼ノ有名ナル條約改正豫議會ニ於テ始メテ我内地ノ開放ヲ提言スルニ至レリ是レ條約改正ニ對スル一新時期ヲ劃セルモノニシテ即チ若シ諸國ニシテ條約改正ヲ承諾スルトキハ我國ハ外國人ニ對シテ日本内地ヲ開放シ動產不動產ヲ所有セシムルノミナラス各種營業ニ關シテモ國民ト同一ノ待遇ヲ與フヘキコトヲ提議シタルモノナリ然レトモ井上外相カ其ノ對價トシテ外國ヨリ獲得セムトシタルモノハ法權稅權ノ全部回復ニアラスシテ法權回復ノ爲メニハ諸外國ニ向ヒテ新ニ法典ヲ編纂シ之レヲ實施スルノ義務ヲ負フノミナラス外國人ヲ裁判官ニ任用スルコトヲ約シ又稅權ノ回復ニ就テハ輸入貨物ニ對スル關稅ヲ從價五分ヨリ一割餘平均ニ引上ケル

コトノ承諾ヲ求メタルニ過キス斯ノ如キ提案ニ對シテハ外國ヨリ
モ却テ國內ニ大反對論起リ朝野^{喧嘩}然其ノ非ヲ鳴ラシタル結果井上
外相ハ遂ニ二十年七月列國公使ニ向ヒテ條約改正談判ノ無期延期
ヲ宣言スルニ至レリ次テ立チタル大隈外相ノ改正案ハ井上案ノ基
礎ヲ襲用シタリト雖トモ我法權回復ニ對スル義務ヲ幾分輕減スル
コトニ努メ遂ニ獨・露・米・英ノ四ヶ國トハ改正條約ノ調印ヲ了
リ明治二十三年二月十日即チ國會開設ノ前日ヲ期シテ之レヲ實施
スルコトトナシタリ然レトモ大隈案モ亦井上案ト同シク國內輿論
ノ攻撃峻烈ヲ極メ大隈外相ハ一凶^漢ノ狙撃ニ遇ヒテ其ノ職ヲ退ク
ニ至リタルコトハ能ク人ノ知ル處ナリ而シテ大隈外相時代ニ於テ
條約改正事業ニ關シ特筆スヘキコトハ彼カ從來ノ合同談判ノ方法

ヲ廢シテ所謂國別談判ノ方法ニヨリ國別ニ改正條約ヲ調印實施スルノ計畫ヲ立テタルコト是レナリ國別談判ノ下ニ條約改正ヲ實施セムカ爲メニハ條約未改正國ヲシテ條約改正國ノ所得スヘキ殊惠ニ均霑セシメサルコトヲ要ス於茲カ彼ハ舊條約中ノ最惠國條款ニ對シ有條件說ヲ主張シ内地開放ハ領事裁判權撤去ノ不可分の條件ナリトノ說ヲ主唱シ條約改正ヲ了セル國ニアラサ~~ル~~ハ内地開放ノ殊惠ニ均霑シ能ハサルコトヲ主張セリ彼カ明治二十一年十一月三十日墨國ト新條約ヲ調印シ諸外國ノ反對アルニ拘ラス墨國人ニ限り我法權ニ服從スルヲ條件トシテ内地居住ノ自由ヲ許與シタルハ其ノ主張ヲ驗セムカ爲メナリキ右大隈外相ノ最惠國條款ニ對スル主張ハ爾來我後繼當局者ノ襲~~踏~~スル所トナリ其ノ後起リタル各事

件ニ對シ諸外國ニ對シテ着々其ノ主張ヲ實行スルヲ得タリ隨ツテ
大隈外相カ始メテ唱ヘタル該主張ハ間接ニ條約改正ヲシテ容易ナ
ラシムルニ至リタルモノナリ
大隈外相ニ次テ立チタル青木外相ハ大隈外相ノ調印セル改正條約
ノ批准ヲ拒絕シ大隈案ニ一大修正ヲ加ヘ外國人ヲ裁判官ニ任用セ
ス法典ノ編纂ハ之レヲ豫約セス又外國人ニ對シテハ居留地以外ニ
於テハ土地所有權ヲ許ササルコトトナスニアラサレハ新條約ヲ締
結スルコト能ハサル旨ヲ列國ニ向ヒテ宣言セリ此宣言ハ幸ニ大體
ニ於テ英國ノ承諾スル所トナリ改正條約ハ五ヶ年後ニ實施スルコ
ト我ハ其ノ一ヶ年以前ニ法典ヲ實施ス可シトノ條件ヲ以テ明治二
十四年四月彼我ノ間ニ改正條約ヲ調印セムトスルノ運ヒニ至ルヤ

青木外相ハ突如トシテ起リタル大津事件ノ爲メニ引責辭職スルノ
止ムヲ得サルニ至リ條約改正ハ重ネテ一頓挫ヲ來セリ
而シテ青木外相ニ代テ立チタル榎本外相ノ時代ニハ明治二十五年
四月條約改正調査委員會ノ設立セラレタルコトアリシモ條約改正
事業ハ現状維持ノ姿ニシテ少シモ進行スルコトナカリキ
明治二十五年八月陸奧^{外相}トナルヤ從來ノ條約改正談判ノ關係ヲ
一掃シ相互對等ヲ以テ條約改正ノ基礎トシ一般の條項ハ一八八三
年ノ英伊條款ヲ模範トシ之レニ加フルニ前當局者ノ畫策ヲ踏襲シ
テ草案ヲ作成ヤリ即チ改正條約ノ實施期限ハ五ヶ年後トナシ其ノ
間ニ於テ我ヲ法典實施等ノ準備ヲ行ヒ兼テ我在外公使ヲシテ國別
ニ改正條約ニ調印ヤシメ其ノ後一齊ニ各國トノ條約ヲ實施スルコ

トトナシ依テ以テ最惠國條款ヨリ生スル紛争ヲ豫防シ而シテ土地
所有權ハ居留地ノ内外ヲ問ハス之レヲ許ササルコトトナシ又稅率
協定ニ就テハ歷代ノ前任者ト同シク井上案ニ準據シタルモ今回ハ
少シク修正ヲ加ヘ一切ノ輸入品ニ就キ協定スルノ方針ヲ廢シ重要
輸入品ノミニ限り平均一割ノ稅率ヲ協定スルコト等ノ修正案ヲ立
テタリ此提案ハ大體ニ於テ諸國ノ承諾ヲ得タル結果頓挫ト蹉跌ト
ヲ重ネ當局者カ全力ヲ傾注シテ計畫セル各國トノ改正條約ハ明治
三十二年七月十七日及ヒ八月四日ヲ期シテ一齊ニ實施セラルルニ
至レリ

要之我條約改正事業ハ明治四年岩倉大使渡歐以來二十八ヶ年間ノ
歲月ヲ費シタル後明治三十二年七月及ヒ八月ニ至リ陸奧外相ノ手

ニヨリテ遂行セラレタルモノニシテ此時以降外國人ハ全ク我法權ニ服従スルコトトナレリ然ルト雖トモ所謂稅權ノ回復ニ關シテハ寺島外相ノ蹉跌以來歷代ノ當局者ハ一部ノ回復ヲ以テ満足シ陸奧外相ノ改正モ亦偏務的ニ重要品ノ大部分ニ對スル束縛ヲ甘受ナルノミナラス我關稅行政權ニ對シテモ猶種種ノ制限ヲ蒙リタリ尙條約改正ニ關シ問題トナリタル本邦ニ於ケル最惠國約款ノ沿革ヲ見ルニ

抑モ舊條約中ノ最惠國約款ハ次ノ如キ特色ヲ有シタリキ

- (一) 露國トノ條約ヲ除ク外孰レモ偏務的最惠國約款有在ナルコト
- (二) 有條件トモ無條件トモ明示セサルコト
- (三) 均霑シ得ヘキ殊惠ヲ通商航海上ノ事項ニ限ル旨ヲ明示セサルコト

ト
右ノ三點ハ舊條約中ノ最惠國條^款ヲシテ我ニ取り最モ不利面倒ナ
ル規定タラシメ一國ニ許シタル利益其ノ性質ノ何タルヲ問ハス即
時且無條件ニ他ノ諸國ヘモ許與ヤサルヘカラサルコトトナリ我國
ノ最モ苦ム所ナリキ故ニ岩倉以下寺島・井上・大隈等歴代ノ當局
者カ立案シタル改正條約ノ我提案ハ孰レモ有條件主義ノ最惠國條
款ヲ採用ヤリ然レトモ當時ノ我政府ニ取りテ最モ緊要ナリシコト
ハ改正條約中ニ有條件主義ノ最惠國條款ヲ挿入スルコトニアラス
シテ舊條約中ノ最惠國條款ヲ有條件主義ニ解スルコト^トアリキ若
シ之レヲ無條件主義ニ解スルトキハ條約改正ヲシテ一層困難ナラ
シムルノ事情アリタリ蓋無條件主義ニ依ルトキハ假リニ我國ニシ

テ或一國ト條約改正ヲ遂行シ其ノ國ニ對シ或ハ内地ヲ開放シ或ハ輸出稅ヲ全廢シテ領事裁判權又ハ協定稅率ヲ廢棄ヤシメタリトスルモ他ノ條約未改正國ハ直ニ條約改正國ノ新ニ獲得シタル右殊惠ニ均霑ス可ク然モ法稅二權ニ對シテハ何等ノ讓歩ヲモ肯ヤサルヘキヲ以テナリ

如斯最惠國約款ハ條約改正ト至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ我當局者ハ夙ニ最惠國約款ニ對スル研究ヲ重ネタリ寺島外相時代ニハ一トラバース、トウキス、及ヒ一セパルト、兩氏ノ意見ヲ徵シ井上外相時代ニハ一トーン、一デニソン、一レスレル、三氏ノ意見ヲ徵シタリシカ是等ノ諸氏ハ一ビートン、氏ヲ除クノ外何レモ有條件主義ヲ主張シ舊條約中ノ最惠國條款ハ條件主義ニ解釋ス可

キモノナルコトヲ辯明セリ然レトモ我當局者カ如斯主張ヲ外國ニ
對シ貫徹スルハ當時ノ國勢上困難トスル所ニシテ井上外相ノ東京
條約改正豫會議ニ於テモ我有條件說ハ米國ノ外之レニ同意スル國
ナカリキ殊ニ井上外相カ條約改正豫會議ヲ開キタルハ諸國トノ條
約改正談判ヲ一齊ニ執行シ依テ以テ最惠國條款ノ適用ヨリ生スル
紛爭ヲ避ケムトスルノ趣意ニ出テタルモノナリ明治二十年四月二
十日ノ會議ニ於テ井上外相カ改正條約中ニ無條件最惠國條款ヲ挿
入スルコトヲ承諾スルト同時ニ各國公使ニ向テ清國ノ領事裁判權
ヲ保持スルヲ理由トシテ最惠國條款ヲ援用シテ各國カ我國ニ於ケ
ル領事裁判權ヲ繼續シ又ハ回復スルノ口實トナス能ハサルコトヲ
宣言シタルカ如キコトモ亦同様ノ注意ニ出テタルモノナリ

然レトモ大隈外相時代ニ至リテハ我有條件說ハ百尺竿頭更ニ一步
ヲ進ムルヲ得タリ即チ一デニソンレ氏ヲシテ最惠國約款ノ沿革ヲ
調査ヤシメ有條件說ニ對スル我根底ヲ固メ舊條約中ノ最惠國條款
ハ有條件主義ニ解ス可キコト及ヒ領事裁判權ノ撤廢ハ内地解放ノ
不可分的條件ナルヲ以テ之レカ撤廢ヲ爲ササル國ハ内地解放ノ利
益均霑スルコトヲ得サルコト等ヲ飽迄モ主張スルノ決心ニ基キ國
別ニ條約改正ヲ遂行シ領事裁判權ヲ撤廢ヤル國ノミニ内地ヲ解放
スルノ計畫ヲ爲ヤリ而シテ一方ニ於テ我主張ノ實際ヲ驗スルカ爲
メ明治二十一年十一月墨國ト新ニ條約ヲ締結シ墨國人ヲシテ我法
權ニ服從ヤシメ其ノ對價トシテ内地ニ住居營業スルノ自由ヲ許可
ヤリ茲ニ於テ果シテ英・佛兩國公使ヨリ墨國人ノ得タル新殊惠ニ

均露ヤムコトヲ請求シ來リシヲ以テ大隈外相ハ明治二十二年八月三日長文ノ書翰ヲ裁シ我有條件的主張ヲ聲明スル所アリタリ然ルニ當時歐洲諸外國トノ改正條約ハ正ニ調印スルノ運ヒニ達シ而シテ是等改正條約カ實施セラレルト同時ニ此問題ハ論争スルノ要ナキニ至ルモノナルヲ以テ英、佛其ノ他ノ該國ハ我主張ニ對シテ強イテ争ハス大隈外相モ亦該國ニシテ條約改正ヲ承諾スル以上ハ有條件說ヲ強テ主張スルコトナク新條約ニハ無條件條款ヲ挿入スルコトニ同意セリ

其ノ後大隈外相ノ條約改正事業ハ蹉跌シ孰レノ國トモ條約改正ハ成立セザリシト雖トモ^墨國人ノ得タル殊惠ニ均露ヤムコトヲ請求セラル國ナカリキ降テ明治二十六年一月陸奧外相時代ニ於テ布哇政

府ヨリ領事裁判權ヲ任意ニ撤廢スヘキニヨリ墨國人ト等シク内地開放ノ利益ヲ得タキ旨照會アリシヲ以テ陸奧外相ハ直ニ之ヲ承諾シ布哇國人ニ内地ニ居住・營業スルノ權利ヲ賦與シタリ此時モ亦英・伊・佛三國公使ヨリ抗議ヲ提出シ來リシモ陸奧外相ノ拒絕スル所トナレリ

其ノ後陸奧外相ノ條約改正事業ハ着着進行シタリシカ明治二十九年四月四日獨逸國トノ間ニ締結セラレタル新條約ニハ獨逸臣民ニ對シ日本ニ於テ批准交換後直ニ工業場所有權ノ保護ヲ相互的ニ與フヘキ旨ヲ規定ヤリ之レ諸外國トノ新條約中ニ存ヤサル規定ニシテ諸外國臣民ハ新條約實施期日即チ三十二年七月十七日以前ニハ斯ル保護ヲ享有スルヲ得サルモノナリ隨ツテ諸外國ハ舊條約ノ下

ニ於テ獨逸カ新ニ得タル新殊惠ニ均霑スルコトヲ得ンヤ否ヤノ問題ヲ生セリ

此時ニ當リテモ亦時ノ當局者タル大隈外相ハ有條件主義ヲ主張シ獨逸ノ新ニ得タル殊惠ニ均霑セムトスル諸國ハ同様ノ對價ヲ提供セサルヘカラス即チ其ノ本國ニ於テ日本臣民ニ對シ工業^所有權ノ保護ヲ與ヘサルヘカラサル旨ヲ主張シタリ而シテ此主張ハ何等重大ナル紛争ヲ惹起スルコトナク^諸該國ノ一部ニ承諾スル所ナリ^ト↓
英・米・佛・蘭・西・匈^ル瑞諾^威・丁其ノ他ノ諸國臣民ニ對シ相互的ニ同様ノ保護ヲ與フルコトナレリ
最後ニ改正條約實施期日ノ異レルヨリ最惠國均霑問題ヲ生シタリ初メ陸奧外相ノ計畫ニ依レハ諸國トノ改正條約實施期日ヲ同一ニ

ヤムトヤシモ種種ノ障礙ヲ生シタル爲メ多數ノ國トノ條約實施期日ハ三十三年七月十七日ト決定シタルニ拘ハラヌ佛埃兩國トノ條約實施期日ハ少シク後レテ八月四日ヨリトナスノ已ムヲ得サルニ至レリ茲ニ於テ七月十七日ヨリ八月三日ニ至ル間ニ於テ起ルヘキ最惠國條款均霑問題ヲ解決ヤサルヘカラサルノ必要ヲ生ヤリ然ルニ時ノ當局者西外相モ亦有條件主義ヲ主張シ佛埃兩國ハ八月四日迄改正條約ニ依リ他該外國ノ得タル内地開放其ノ他ノ殊惠ニ均霑スルヲ得ス

他ノ諸外國(但シ獨逸ハ例外ナリ獨逸ニ對シテハ特ニ外交文書ヲ以テ他國ニ先チテ領事裁判權ヲ拋棄ヤシメサルコトヲ約定ヤリ)ハ七月十七日以後ハ佛埃兩國ニ均霑シテ領事裁判權ヲ保有スルコ

トヲ得サルコトトヤリ最モ改正條約ニ基ク新關稅率ハ諸外國ニ對シ其ノ承諾ヲ得テ一齊ニ三十二年一月一日ヨリ實施シタルヲ以テ何等最稅率ニ關スル最惠國待遇問題ヲ惹起スルノ餘地ナカリキ之ヲ要スルニ我國ニ於テハ舊條約ノ下ニ於テ暫時最惠國約款有條件主義ヲ主張シ大隈外相以降ハ着着事實ノ上ニ於テモ其ノ主張ヲ貫徹シタリ

故ニ我國ニ於テハ現行條約ニハ條約上ノ明文ニ依リ英伊條款ヲ挿入セリト雖トモ沿革上ヨリ云フトキハ我國ノ見解ハ改正實施以前ニ於テハ全然有條件主義採用^ルモノナリト謂フコトヲ得ヘシ

二、條約改正方針ニ關シ明治二十一年十一月外務大臣大隅重信ヨリ
在外各帝國公使ニ宛テタル訓令要旨
條約改正一件ハ昨會會議中止ノ後今日迄其儘ニ相成居候處不日諸
法律編纂濟上モ昨~~年~~ノ草案ニテハ到底我政府ニ於テ承諾難致箇條
不尠且ツ再ヒ條約各國ノ代理者ヲ集メテ會議ヲ公開シ逐條討論ニ
及候テハ彼是意見ヲ異ニシ到底満足ノ結果ヲ得サルハ顯然ト存候
ニ付此際大ニ前日ノ趣向ヲ變シ是迄ノ行掛リヲ斟酌シテ出來得ル
丈ハ外國人ノ利益ヲ計リ且ツ同時ニ我國ノ利益ト威嚴トヲ可成保
持セントノ目的ヲ以テ一ノ改正草案ヲ起草シ會議中止中ナルニ係
ハラス條約各國政府ノ内覽ニ供シ別々ニ其意見ヲ質ス積ニ有之候
尤モ總テ條約國ト協議スルコトニ致候テハ又々紛雜ヲ極メ且ツ英

獨佛米露伊ノ六國即チ謂ユル大國ノ同意ヲ得^レ其他ノ各國ハ自然之ニ從テ進退可致モノニ付先ツ前記六ヶ國ト協議可致積ニ有之候右改正草案ノ大體ヲ述レハ昨年ノ如ク裁判權條約ト通商條約ト二箇ノ區別ヲ立テスシテ兩者ヲ總括シテ一ノ和親通商條約トシテ其箇條ハ昨年ノ通商條約ヲ基礎トシテ之ニ多少ノ修正ヲ加ヘ且ツ條約實施後五ヶ年間ハ外國人居留地内ニ限り領事裁判權ヲ從前ノ儘ニ繼續シ右期限經過後ハ領事裁判及右ニ附屬シタル外國人ノ特權ヲ一切廢止シテ帝國ノ裁判權ヲ全國ニ普及セシムルコト及右領事裁判權繼續ノ間ト雖モ純粹ニ日本ノ裁判權ニ服從セント欲スル外國人ハ之ヲ爲スコトヲ得ル等ノ數條ヲ加ヘタルモノニ有之候將又外國人ヲ我判事ニ任用シ及我法律ヲ泰西ノ主義ニ從テ編纂スル

等昨今ノ裁判權條約案ニ記載セラレタル箇條ハ一切之ヲ今度ノ新草案ヨリ取除テ其代リトシテ大審院ニ外國人ノ判事ヲ置キ外國人ノ被告タル事件ノ最終審裁判ヲ掌ラシムルコト併ニ我政府ニ於テハ民法以下ノ該法律ヲ編纂シ其英文翻譯文ヲ公布スルコトニ關シ外務大臣ノ名ヲ以テ二箇ノ宣言ヲ爲スヘキ筈ニ候右條約及宣言草案ノ寫別紙三通差出候間右^ヲ熟讀相成候ハハ前文大略中述ヘタル趣向ノ詳細御會得可相成ト存候然ルニ新條約第十五條及十七條ノ趣意ヲ爰ニ説明スルハ必要ノ事ト存候第十五條條約實施ノ日ヨリ五ヶ年間外國人居留地及ヒ之ニ接近シタル地ニシテ外國人ノ居留ヲ許シタル場所(神戸ノ如キハ尋常居留地ノ外日本人ト雜居ヲ許シタル一區ノ地アリ)及外國船ノ入港ヲ許シタル港灣(東京ノ如

キハ~~南~~市ナレトモ其港ニ外國船ノ入ルヲ許サスニ限り領事裁判
權ヲ從前ノ儘ニ繼續スルヲ許スハ治外法權ヨリ純粹ノ日本法權ニ
移ルノ間若干ノ移動期間(トランジトリー、ビリ~~ツ~~ツド)ヲ置キ
其間ニ外國人ヲシテ日本ノ法律ノ何物タルヲ知ラシメ且ツ新制~~度~~
ニ習熟スルノ時ヲ與フルカ爲ニ有之候第十七條領事裁判權全廢ニ
前タチ望ノ者ヘハ全ク日本ノ裁判權ニ服從スルコトヲ許スハ別紙
拙者ノ宣言ニモ有之候通我政府ヘ任用シタル外國人判事カ依然居
留地ニ於テハ自國ノ裁判權ニ服從スルノミニテ日本ノ裁判權服從
セサルハ體裁上甚タ不都合ニ付右等外國人ハ領事裁判權ノ存廢如
何ニ係ハラス全ク日本ノ裁判ニ從ハシムル仕組ヲ設ケンカ爲加ヘ
タルモノニ有之候尤モ其他ノ外國人ニ於テモ望ノモノハ右箇條ニ

依リ日本ノ裁判權ニ服從スルコトヲ得ルハ勿論ナレトモ重モニ前
文判事ニ任用セララルヘキ者ヲ目的トシタルモノニ有之候

後畧

(已號用紙)

外務省

三、大隈條約草案拔萃及宣言

大隈條約草案

第十五條 本條約實施ノ日ヨリ五箇年間ハ、、、國領事裁判所
カ、、、國~~カ~~、民及ヒ其財産ニ對シ其裁判權ヲ行フノ區域ハ
箱館、東京、横濱、大阪、神戸及ヒ長崎ノ外國人居留地及ヒ該居
留地港灣ノ内ニテ現ニ、、、國船舶ノ爲メ開カレタル港灣並ニ
該居留地ニ接近シタル土地ニシテ條約或ハ他ノ明カナル取極ニ依
リ、、、國~~カ~~、民カ永久ニ住居シ且土地ノ賃借ヲ爲スコトヲ
許サレタル他ノ場所ニ限ルモノトス又同日ヨリ後ハ前掲外國人居
留地港灣及ヒ場所ヨリ以外ハ日本國中何レノ地ニ於テモ日本國裁
判所ハ日本ノ法律ニ從ヒ、、、國~~カ~~、民及ヒ其財産ニ對シ完

(已號用紙)

全且單獨ナル民事及ヒ刑事ノ裁判權ヲ有シ且之ヲ執行スヘシ而シテ右五箇年ノ終リタルトキハ該時日本國ニ於ケル、、、國領事裁判所カ執行シタル一切ノ裁判權竝ニ該裁判權ノ一部分若クハ其附屬トシテ、、、國、民カ該時享有シタル一切ノ特例ノ權利及免除ハ豫告ナクシテ全ク消滅廢止シ而シテ該時ヨリ後ハ總テ前掲ノ裁判權ハ日本國裁判所之ヲ回收シ且執行スヘシ但領事裁判權廢止ノ爲メ定メラレタル時ニ於テ、、、國領事裁判所ニ於テ裁判中ノ訴訟事件ニ付テハ裁判終決迄、、、國領事裁判所ノ裁判權ヲ繼續スヘシ

(已號用紙)

第十七條　、、、國々、民ニシテ、、、國領事裁判權廢止ニ
先タチ何時ニテモ日本國ノ裁判權ニ單獨ニ服從セント欲スル者ア
ルトキハ其旨ヲ表スル正當ナル宣言書ヲ其所轄領事竝ニ當該日本
國地方官ニ差出シテ右服從ヲ爲スコトヲ得ヘシ但、、、國領事裁
判所ハ該、、、民カ右服從ヲ爲ス前ニアリテ已ニ負擔シタル責務
又ハ犯シタル犯罪ニ關シ該、、、民ニ對シ有スヘキ裁判權ヲ右服
從ノ爲メ失フコトナシ

宣言ノ一

帝國政府ハ其大審院ニ於テ裁判官ノ資格ヲ以テ職務ヲ執ラシムルカ
 爲メ外國法律家若干名ヲ任用スルコトヲ決シタル旨ヲ皇帝陛下ノ外
 務大臣タル下名ハ、國、ニ向テ爰ニ報道致候且下名ハ皇帝陛
 下ノ政府ニ代リ民事若クハ刑事ノ訴訟ニシテ、國民カ被告人若ク
 ハ刑事被告人トシテ直接ノ關係ヲ有スルモノヲ大審院ニ於テ終審或
 ハ第一審且終審トシテ審理スルトキハ其訴訟ヲ審理スル裁判官ノ多
 數ハ歐羅巴或ハ亞米利加出身ノ者タルヘキ旨ヲ陳言スルコトヲ委任
 セラレ候

、國民カ前陳ノ方法ニ因リテ利益ヲ受クルノ程度ヲ示サンカ爲メ
 下名ハ帝國ノ新裁判~~新~~構成ニテハ刑罰ノ二箇月ノ禁錮及五十圓ノ罰

金若クハ單ニ百圓ノ罰金ヲ超過スル一切ノ刑事事件ハ上告ノ手續ヲ以テ或ハ第一審且終審トシテ大審院ニ提出スルコトヲ得ヘク又權シテ一切ノ民事事件ニシテ交渉金額ノ百圓ヲ限^キスルモノハ同様大審院ニ上告スルコトヲ得ヘキ旨ヲ言明スルコトヲ適當ト認メ候

皇帝陛下ノ政府ハ斯ノ如ク日本國ノ裁判官トシテ任用スヘキ外國法律家ハ何名ナルヘキヤヲ豫メ確言スルコト能ハスト雖モ其數ハ擔任ノ職務ヲ完全^ニ且迅速ニ盡スニ足ルヘキモノナルハ下名カ、國公使ニ向テ容易ニ保證スルヲ得ル所ニ有之候

此名譽ナル職位ニ撰任セラルヘキ法律家ハ理由アリテ職ヲ免セラルルニアラスンハ四年ヨリ少ナカラサル間ハ其職ニ置カルルノ權ヲ有スヘク又帝國政府ハ其他各般ノ點ニ關シ右法律家ヲシテ十分ノ獨

立ト衡平トヲ守ラシメ且其風ヲ獎勵スルコトヲ怠ラサルヘク候然リ
而シテ歐羅巴若クハ亞米利加出身ノ裁判官ヲシテ限リアル時期内ト
雖モ其裁判官トシテ勤務スヘキ裁判所ヨリ以外ノ裁判所ノ裁判權ニ
服從セシムルコトハ帝國政府ノ最モ好マサル所ナルニ因リ該職ニ撰
任セラレタル者ハ本日ヲ以テ日本國及ヒ、國政府ノ間ニ訂結セラ
レタル條約ノ約款ニ從ヒ日本帝國裁判所ノ裁判權ニ正當ノ服從ヲ爲
スコトヲ要スヘク候

下名カ以上簡單ニ概說シタル新制度ハ前掲ノ條約ノ實行セラルルト
同時ニ之ヲ實行シ十二箇年間ハ必ス之ヲ繼續スヘキ筈ニ有之候
帝國政府ハ若シ必要アリト認ムルニ於テハ前掲ノ期限以後モ此新規
ナル裁判構成ヲ維持スヘシト雖モ適當ノ時期ニ於テ右ノ必要アルト

(已號用紙)

否トヲ決スルハ全ク其權内ノコトタルヘキヲ爰ニ明言致置候
前述ノ方法ハ素ト帝國ノ司法制度ヲ改良スルノ目的ヲ以テ採用シタ
ルモノナレトモ帝國政府ハ又之ヲ以テ、國政府及ビ、民ノ權利及
ヒ利益ハ新タナル條約ニ據リテ十分ノ恭敬ト保護トヲ受クヘキコト
ノ十分ナル保證ト見做サルルニ足ルヘキヲ希望致候
右得貴意候 敬具

明治二十二年

月

日東京外務省ニ於テ

外務大臣伯 大隈 重信

在日本東京

外務省

宣言ノ二

皇帝陛下ノ外務大臣タル下名ハ日本國ニ於ケル・・・國領事裁判權ヲ遂ニ全廢スル件ニ關シ本日ヲ以テ日本國及ヒ・・・國政府ノ間ニ訂結セラレタル條約ノ約款ヲ考查シ皇帝陛下ノ政府ハ目下左記ノ法典即チ

第一 刑法

第二 治罪法

第三 民法

第四 商法但破産法並ニ商船及爲替手形ニ關スル法律ヲ包含ス

第五 訴訟法但商事ニ關スル訴訟手續ヲ包含ス

ヲ改正編纂スルコトニ從事スル旨ヲ爰ニ報道スルコトヲ適當ト認メ

候

帝國政府ハ右ノ大業ハ本年中ニ完了スヘキコトヲ信ス且該政府ハ・
・國領事裁判所ノ全廢ヨリ若干時前ニ法律編成ノ業ヲ完結スルヲ
必要ナリト認ムルカ故ニ何等原因ニヨルニ拘ラス若シ新條約實行ノ
日ヨリ二箇年以内ニ前記ノ法典ヲ完成發布スルコト能ハサル場合ア
ルニ於テハ該條約ニ示定セラレタル・・國領事裁判權全廢ノ期日
ヲ右法典ノ發布セラレタル後少クモ三箇年ヲ經ル迄延期センコトニ
同意スヘキ旨ヲ・・國政府ニ請フニ至ルヘク候
皇帝陛下ノ政府ハ外國法律家ヲ雇テ數年間日本國裁判官ノ職務ヲ執
ラシムル決心ヲ有スルニ因リ帝國政府ハ或ハ歐羅巴語ニ帝國ノ重要
ナル法律ヲ反譯スルコトヲ必要ナリト感シ候然ルニ日本國ニ於テ最

(已號用紙)

モ普通ニ行ハルル所ノ歐羅巴語ハ英語ナルヲ以テ下名ハ皇帝陛下ノ
政府ニ代リ前記法典ノ公正ナル英語反譯文ハ右法典ノ發布後一箇年
半以内ニ公布セララルヘキコトヲ言明致候
法律ノ公正ナル反譯文ヲ發布スルノ制ハ少ナクモ歐羅巴若クハ亞米
利加出身ノ裁判官ヲ任用スル間ハ之ヲ繼續スヘク候
右得貴意候 敬具

明治二十二年

月 日

東京外務省ニ於テ
外務大臣伯 大 限 重 信

在日本東京

外 務 省

四、米獨露トノ條約調印期日

明治二十二年一月三日附ヲ以テ在英佛露伊奧帝國公使へ訓令ヲ發セリ

明治二十二年二月二十日外務省ニ於テ日米新條約調印

同 年六月十二日伯林ニ於テ日獨新條約調印

翌十三日蘭白葡布西ノ各公使ト各別外務省ニ引見シテ新條約案及附屬書類ヲ交附ス瑞西、秘露二國ハ在獨在米兩公使ニ訓令シテ交渉セシム

同 年八月七日外務省ニ於テ日露新條約調印

同 年十月七日外務省ニ於テ日獨間ニ貿易規則、官設倉庫規則並港則ニ關スル議定書調印

五條約實施時日延期ノ手續及其理由書摘要

明治二十二年十二月十三、十四日ヲ以テ總理大臣三條實美公躬ヲ
 露西亞、獨逸及合衆國ノ三公使ヲ訪問シ明年二月十一日即チ新條
 約實施期日ヲ延滯スルノ旨ヲ申入レラレタリ抑モ此手續ヲ履行ス
 ルノ已ムヲ得サルノ場合ニ遭遇シタルモノハ即チ嚮キニ大隈伯カ
 條約改正ノ任ヲ負擔スルニ方リ明治二十年^間ニ起案シタル通商條
 約案ニ幾多ノ修正ヲ加ヘ國別談判ヲ開ラキ本年二月二十日ヲ以テ
 先ツ~~其~~合衆國ト新條約調印ノ談判ヲ結了シ尋テ獨逸、露西亞ノ
 兩國モ之レニ調印スルコトト爲レリ然ルニ六七月ノ交ヨリ某々政
 黨派ノ軋轢漸ク崇リ之カ爲メ^物情モ頗ル沸騰シ最初ハ法典編纂ノ
 粗漏ナルコトヲ論シ次ニ外國判事ノ任用ヲ以テ憲法違犯ノ嫌アリ

トノ説起リ樞密院・元老院等首トシテ之ヲ唱道シ延テ民間ニ波及
シ新聞ニ演舌ニ衆論其傲々^勢ヲ極メ或ハ壯士横行シテ威動ヲ示シ或
ハ中止建白書ヲ以テ政府ニ迫ルニ及ヘリ而シテ其ノ重ナル反對ノ
點ハ「外國判事ノ任用ハ憲法ニ違犯スルト」外國人ニ土地所有
權ヲ許スハ幼稚^極ナル我人民ノ爲メニ危険ナリト云フニ在リ是ヲ
以テ衆論ノ激昂ハ其ノ極度ニ達シ民心ハ一變シテ動モスレハ攘夷
ノ精神ヲ露ハシ囂々^勢トシテ停止スル所ヲ知ラサルカ如クナリ
キ然ルニ十月十八日ニ至リテ大隈伯ハ兇徒ノ爆撃ニ遭ヒタルニ因
リテ世論ノ激動ハ一時溘然トシテ寢ミタルノ姿トナリタリ然ルニ
政府ハ一方ニ於テハ露西亞、獨逸、合衆國ノ三政府ト業已ニ新條
約ニ調印シ明年二月十一日ヲ以テ實施スルノ約アリ又他ノ一方ニ於

(已號用紙)

於テハ大隈伯ノ遭難ト共ニ總理大臣ノ更迭アリタルニ由リ到底僅
僅タル時間ニ於テ前顯實施ノ準備ヲ整頓スルコトハ出來得ヘキノ
事業ニアラス實ニ困難ノ地位ニ陥リタリト謂フヘシ因リテ外務省
ハ在外公館ニ訓令シ獨逸及合衆國兩政府ノ新案ニ對スル情態ヲ損
リタルニ兩政府共ニ早ク已ニ我内國衆論ノ沸騰セル有様ヲ察シ
新條約ヲ批准スルノ不利益ナルコトヲ覺知セルヤ我條約改正ノ件
ハ本年ノ議院ニ提出セサリシトノ實ヲ得タリ此ニ於テ我政府ハ斷
然實施期日(二月十一日)ヲ延引スルコトニ決定シ總理大臣三條
公ノ名ヲ以テ電信ヲ在露・獨・米・我公使ニ差發シ即日同公躬ヲ
在東京露・獨・米三公使ヲ訪問シ右ノ電文ヲ示シ附屬談判^書ノ通
延期ヲ申入ルルコトト爲レリ (明治二十二年十二月十八日)

外務省